

科 目	学 部	学 科	専攻・コース	
小論文	看護学部	看護学科	—	
受験番号		氏 名		採 点

問1 次の文章を読み、あなたの「教養」に対する考えについて、筆者の考えと比較しながら、800字以内で述べなさい。

身を養うということ

ある日、芸術系の大学で教えている友人と、いつものように何とはなくおしゃべりをしていて、話がおもしろい方向に展開しだした。いつもなら、最近の注目株、といった話題になるのだが、その日は妙にくそまじめに、そもそも俺たちは何をしに美術館に行っているのだろうという話になった。

彼の説はこう。
美術館に行くひとには、三つの動機がありうる。一つは、見たかったのにこれまで見られなかったものに、やっと出会えるというもの。いま一つは、これまで一度も見たこともないようなものに出会えるかもしれないというもの。そして三つ目は、見なければならぬものだから見に行くというもの。

これ以外にも、みんながいいと言うから見に行くとか、空き時間ができたのでふと立ち寄るといったやや他動的な理由も考えられるだろうが、いまは除外しておく。

さて、一番目の動機は、美術ファンのほとんどが共有するものだ。二番目の動機も、たしかにそういう面があるとおもう。見たこともないような新規なもの、すぐには理解しがたいようなものにふれることで、芸術を見る眼、ひいては世界を見る眼を洗いなおしたいという思いは、プロ、アマいずれにおいても強いものがあるとおもう。

問題は三番目だ。見なければならぬものとは何かということだ。どうしても見たいわけでもなければ、ぞくぞくするような未知の刺激を浴びるようにはおもえないけれど、それでも一応見ておかなければならぬもの。

じぶんの好きなもの、じぶんを揺さぶるであろうものに惹かれて美術館に行くのではなく、見なければならぬから行くというのは、一見、消極的な動機であるかにみえる。けれども、じぶんのまなざしに別の補助線を入れることで、まなざしの構えというか入射角というものをつねに調整しておくことは、美術における変化の徴候、あるいは未知の表現をキャッチするにはとても大切なことである。その補助線の一つが、じぶんをこれまで惹きつけることはなかったけれど、少なからぬひとが評価してきた表現の水脈である。

ここで「教養」という言葉がふと思い浮かぶ。「教養」とは、一言でいえば、何がほんとうに大事で、何が場合によってはなくしてもいいものかを見分ける力のことである。ものごとの軽重の判断がつくこと、と言いかえてもよい。

そういえば以前、内田樹^{たつろ}さんが『街場の現代思想』のなかで、大学の講義で学生がまず身につけなければならないものとして、次のような能力をあげていた。「なんだかまるで分からないけれど、凄そうなもの」と「言っていることは整合的なんだけど、うさんくさいもの」を「直観的に識別する前－知性的な能力」である。

ここに「教養」の原型があるとわたしもおもう。こうした「前－知性的な能力」を身につけるためには、関心があるないにかかわらず、多様な思考や表現の冒険にいったん身をさらさなければならない。じぶんの関心とはさしあたって接点のない思考や表現にもふれなければならない。そのなかで、じぶんの興味とは異なる補助線を立てることで、より客観的な価値の遠近法をじぶんのなかに組み込まなければならない。要するに、世界を受けとめるキャッチャー・ミットをとにかく大きくしておくということだ。

しばらく前に耐震偽装が大きな問題になり、その後も食品への異物混入や巧妙なIT詐欺、天下りした役人による談合や年金記録の紛失などといった不祥事が続いたけれど、そして世の中が大騒ぎになったけれど、これらの事件を忘れるのとにかくはやい。まるでみんな、普遍的健忘症にかかったかのようである。

なぜこんなにもはやく忘れるのか。一つ一つの事件を、それらがどのような構造的な要因のなかから生まれているのか、何が表層的な徴候で、何が構造そのものの軋^{きし}みであるかの判断を、大きなスケールの価値の遠近法のなかでなさなかったからである。すべては走馬燈のように、感情の表面を次々とゆらめかせただけだからである。

まなざしがどれほど遠くまでおよぶか、どれほど深く^{そくえん}測鉛を垂らせるかは、おそらくはそのひとの「教養」にかかっている。そのためには、これまでじぶんの関心の外にあったけれども「一応は見ておかなければならぬもの」に、ふだんから触れつつけておく必要がある。身を養うというのは、そういうことだとおもう。

科 目	学 部	学 科	専攻・コース	
小論文	看護学部	看護学科	—	
受験番号	氏 名			採 点

問 1

	◀100字
	◀200字
	◀400字
	◀600字
	◀800字

科 目	学 部	学 科	専攻・コース	
小論文	看護学部	看護学科	—	
受験番号		氏 名		採 点

問2 次の計算をなさい。計算は余白を使用しなさい（消さなくてよい）。

(1) 原価 1,500 円の商品がある。この商品に原価の 2 割を利益として定価をつけた。売れ行きが悪いため、定価の 2 割引で売っている。現在の売価はいくらか。

回答

円

(2) 1 限目の教室に男女あわせて 50 人の学生がいた。2 限目になり、男子学生が 50%減り、女子学生が 50 %増えて、全体で 43 人になった。現在、教室には女子学生は何人いるか。

回答

人

(3) 14 %の食塩水 300 g と、17 %の食塩水 400 g があり、これを一つの入れ物に入れた。この中に水を加えて食塩水の濃度を 10 %にしたい。水は何 g 必要になるか。

回答

g

(4) ある水槽に水を満たすために、水道管 A 単独の給水では 12 分、水道管 B 管単独の給水では 24 分、水道管 C 単独の給水では 36 分かかることがわかっている。

今回、水道管 A と水道管 B を使って給水し、途中から水道管 C 単独の給水に切り替えて満水にしたところ、全体で 15 分かかった。

水道管 A と水道管 B の給水から、水道管 C 単独の給水に切り替えたのは、給水を始めてから何分後か。

回答

分後